

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

－大谷地区 本経寺墓地発掘調査報告書－
【山吹城南西麓の郭遺構の調査】

平成 26 (2014) 年 3 月

島根県教育委員会

序

石見銀山遺跡は鉱山遺跡としては、アジアで初めて世界遺産登録された遺跡であります。また、平成22年度は充実した保護を目指すため資産の範囲を拡大しました。

鉱山操業活動が激減して久しい日本においては、鉱山そのものが忘れ去られようとしていましたが、石見銀山の世界遺産登録によって、現在は国内各地の鉱山遺跡にも光が当たれつつあります。

この世界遺産登録に向けて島根県と大田市では、平成9年から発掘調査や文献調査など様々な調査に取り組み、登録後においても引き続きその価値を高めるために調査を継続しているところであります。

本書は、平成24年度に世界遺産保存整備事業石見銀山地区M工区落石対策事業に伴って実施した大谷地区本経寺墓地発掘調査の成果を中心に報告いたします。

この発掘調査では、石見銀山防衛の拠点である山吹城の郭と考えられる遺構・遺物が確認され、17世紀初頭の銀山防衛体制について新たな知見を得ることができました。山吹城は、16世紀前半～17世紀初頭まで約100年間にわたって石見銀山の支配・防衛の拠点でしたが、城郭としてどのような変遷をたどったのか不明確な点も多く、今回の発掘調査を切っ掛けとして、さらなる調査研究の進展が期待されるところです。

この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

平成26年3月

島根県教育委員会

教育長 今井 康雄

例　　言

1. 本書は、世界遺産保存整備事業石見銀山地区M工区落石防止事業に伴って実施した発掘調査報告書である。

2. 調査した場所は以下のとおりである。

平成24年度 大田市大森町大谷地区

- 1 トレンチ 大田市大森町ホ103 寺ノ上石ヶ廻
- 2 トレンチ 大田市大森町ホ281-3、ホ281-4
- 3 トレンチ 大田市大森町ホ281-4、ホ289-4

3. 調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査活用委員会

井上 雅仁（島根県立三瓶自然館学芸GL）

大橋 泰夫（島根大学法文学部教授）

勝部 昭（元島根県教育委員会教育次長）

黒田 乃生（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）

小林 准士（島根大学法文学部准教授）

高安 克己（島根大学名誉教授）

田辺 征夫（前奈良文化財研究所所長）

中塙 弘（DOWAホールディングス株式会社取締役）

仲野 義文（石見銀山資料館館長）

中村 俊郎（中村プレイス株式会社代表取締役社長）

西村 幸夫（東京大学先端科学技術研究センター教授）

林 秀司（島根県立大学教授）

原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校准教授）

村上 隆（京都国立博物館学芸部長）

和上 豊子（前石見銀山ガイドの会会长）

事務局（平成24・25年度 島根県教育委員会文化財課）

祖田浩志（文化財課長・H24年度）、野口 弘（文化財課長・H25年度）、後藤守弘（文化財課 GL）
若槻真治（世界遺産室調査・H24年度）、松本洋子（世界遺産室長・H25年度）

鳥谷芳雄（同主席研究員）、柳原幸春（同企画員）、間野大丞（同企画員・H24年度）、岩橋孝典（同専門研究員）、目次謙一（同専門研究員・H24年度）、田原淳史（同主任・H25年度）、矢野健太郎（同主任研究員・H25年度）、角俊一（同主任）、小杉紗友美（同嘱託）

調査員 岩橋孝典

発掘調査指導者

田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）

大橋泰夫（島根大学法文学部教授・石見銀山遺跡調査活用委員会）

山根正明（松江市教育委員会文化財課史料編纂室専門官）

4. 下記の方々から、調査へのご協力・ご指導等を頂いた。記して謝意を表したい。

小川徹、中田正敏、内田敏文、株式会社コスモ建設コンサルタント

中田健一、野島智実、西尾克己、新川隆、尾村勝

5. 挿図の縮尺は、図中に示した。また、挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。

また、レベルは海拔高を示す。発掘に用いた基準点は、落石対策工事実施設計に伴い現地に設置された4級基準点網を使用した。

6. 出土資料、実測図、写真等は石見銀山世界遺産センター（大田市大森町イ1597番地3）において保管している。

7. 本書の執筆・編集は岩橋が行った。

本文目次

第1章 調査の経緯	1
第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史	
第1節 遺跡の位置と環境	2
第3章 本経寺墓地の発掘調査	
第1節 本経寺・西善寺の概要	4
第2節 本経寺墓地の概要	5
第3節 山吹城の概要	5
第4節 発掘調査・悉皆調査の経過	8
第5節 遺構・遺物の概要	11
第6節 発掘調査のまとめ	18

挿図目次

第1図 石見銀山遺跡仙ノ山周辺図 S=1/25,000	4
第2図 石見銀山遺跡大谷地区周辺図 S=1/1,000	7
第3図 大谷地区本経寺墓地全体平面図 S=1/300	9
第4図 1トレンチ平面図・土層断面図 S=1/40	12
第5図 本経寺墓地出土品実測図	13
第6図 2トレンチ平面図・土層断面図 S=1/40	15
第7図 3トレンチ平面図・土層断面図 S=1/40	16
第8図 山吹城全体図 S=1/15,000	21

表目次

第1表 金属製品の蛍光X線定性分析結果一覧	17
第2表 本経寺墓地出土遺物観察表	22

写真図版目次

写真図版 1 本経寺墓地 1トレンチ	24
写真図版 2 本経寺墓地 2トレンチ	25
写真図版 3 本経寺墓地 3トレンチ	26
写真図版 4 本経寺墓地出土遺物 土器・陶磁器・石製品	27
写真図版 5 本経寺墓地出土遺物 金属製品	28

第1章 調査の経緯

石造物調査は、島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のために、昭和60年度に徳善寺跡などについて、天正から慶長年間の紀年銘が存在する墓石を中心に一部の確認調査を実施したことがその始まりである。

平成9・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を押えるため、紀年銘がある墓石の調査を重点的に進められたが、墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、戦国時代の墓石が存在する地区は、生活していた時期も戦国期に遡る可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうして石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵院寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆的調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調

査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22～23年度は、以前に分布調査を行っていた石銀地区（墓Ⅲ）の悉皆調査を実施した。石銀地区は石見銀山に於ける初期鉛山業の中心の一角であり、墓Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの悉皆調査を通して、代官墓・奉行墓にも匹敵する規模の石塔群が樹立されていることが判明した。石銀地区的史的評価を行う材料は石造物調査からも着々と提供される段階となっている。

平成24年度は、石銀地区的うち未調査であった墓Ⅴの調査を予定していたが、平成24～25年度に実施予定の世界遺産保存整備事業石見銀山地区M工区落石防護柵設置予定地に本經寺墓地があり、多数の石造物が存在することが確認されたため、予定を変更して急遽こちらの調査を実施することとなった。

また、石見銀山遺跡の寺院付帯墓地ではよく見られる事象であるが、墓群中に墓石のない空閑地がしばしば所在することが指摘されている。本經寺墓地に置いても、墓石の造立されない空閑地が存在することから、帰属時期を含めて、この空閑地の性格の確認と遺構面の広がりを把握し、調査成果を落石防護柵の実施設計に反映することを意図した。

【参考文献】

- 1 島根県文化財愛護協会 1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』
- 2 島根県教育委員会他 1999『城跡調査・石造物調査・間歩調査編』『石見銀山』第3分冊
- 3 島根県教育委員会他 1999『民俗調査・港湾調査・街道調査編』『石見銀山』第6分冊
- 4 温泉津町教育委員会 1999『1999 温泉津』
- 5 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1－妙正寺－』
- 6 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2－龍昌寺跡－』
- 7 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2003

- 『石見銀山遺跡石造物調査報告書3－安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外一』
- 8 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4－長樂寺跡・石見鉛山附地役人墓地（河島家・宗國家一）』
- 9 島根県教育委員会 2004『石見銀山街道－辆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書一』
- 10 島根県教育委員会 2005『石見銀山街道－辆ヶ浦・沖泊集落調査報告一』
- 11 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5－一分布調査と墓石調査の成果一』
- 12 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書6－温泉津地区恵璇寺墓所一』
- 13 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書7－温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（1）一』
- 14 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書8－温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（2）一』
- 15 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書9－西念寺墓地（3）・安原備中墓・大光寺墓地一』
- 16 大田市教育委員会 2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区 保存対策調査報告書（補訂版）』
- 17 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10－金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物一』
- 18 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11－極樂寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地區』
- 19 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12－仙ノ山石銀地区墓IIIの調査』
- 20 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13－大谷地区本経寺墓地の調査』

第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史

第1節 遺跡の位置と環境

(1) 銀山の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約 180 km 余りの長い県土を持ち、古代律令制以来の旧国単位では、「出雲」「石見」「隱岐」の3国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置している。

東隣の出雲地域では、斐伊川・神戸川をはじめとする河川によって、まとまった沖積平野が形成されている。これに比べて石見では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており大規模な沖積平野は見られない。海岸部にまで迫る山塊群に象徴されるように、古くは「石海」「石美」と称されたことに石見の語源があるともいわれている。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高 538 m）は、前期更新世（約 100 万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要害山、馬路高山などから構成されるこれらの山は、「溶岩円頂丘」または「トロイデ式火山」と呼ばれ、粘性が高いデイサイトで形成されている。

仙ノ山の鉱脈は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床型の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床という2つの鉱床が知られている。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まないとされる。また、永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鐵鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀などが含まれる。

(2) 銀山の歴史的背景

石見銀山遺跡は、周辺の歴史においても地形的な要因から独特ともいえる特色を有している。以下に石見銀山周辺の歴史的な環境を概観してみたい。

石東地域では繩文・弥生時代の発掘調査例が少なかったが、近年の仁摩温泉津道路に伴う発掘調査などで資料が増加してきている。大田市仁摩町では、潮川流域で古屋敷遺跡、五丁遺跡群、川向遺跡などで繩文時代晚期～弥生時代前期の遺物・遺構が見つかっているほか、大田市鳥井南遺跡では、日本海を望む丘陵上で弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡等が多数検出されている。仁摩町大國の庵寺遺跡では弥生時代中期～後期の加工段や住居跡が見つかっている。また、同所の庵寺古墳群では、古墳時代前半の精緻な箱形石棺が見つかっており、副葬品に中国前漢で製作された八禽鏡が納められていた。

平安時代前半期の遺跡では、縄釉陶器が出土した仁摩町殿屋敷遺跡や円面硯が出土した大田市八石遺跡が注目される。これらの遺跡は、中世前期の貿易陶磁も出土していることに加えて、河口に近い川岸という立地からも海上交通の存在を予感させるものである。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では、古墳時代の住居跡の他に、奈良平安時代の建物跡や木簡が多数出土している。

平安時代末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な荘園が成立しており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの荘園、国衙領が成立する。仁摩町天河内の白石遺跡、清石遺跡は、12～14世紀にかけて継続する遺跡であるが、総柱構造の主屋をもつ住宅遺構が検出されており、貿易陶磁器も一定量出土していることから、清原(久利・仁万)氏など在地有力武士層の関与が考えられる。また、仁摩町馬路の牧原Ⅱ遺跡では、13世紀代の鉢関連遺物が多量に出土しており、鉄生

産も活発に行われていたことも知られている。

南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見守護を兼任するが、応永の乱(1399)で大内義弘が堺で戦死し石見守護職を没収される。しかし、義弘の弟の盛見は、応永8(1401)年には大内氏の家督を実力で奪取し、石見国のうち邇摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれた。永正年間(1504-1521)に至ると大内義興が石見一円の守護権を奪回し、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われた。

温泉津町湯里の湯里天神遺跡では15世紀代を中心とした畠遺構が検出されている。ここでは、牛の足跡や糞跡が多く見つかっており、牛耕が確認される他、低層の石垣によって耕作地が区画されており、現代に繋がる棚田・段々畠景観が15世紀には形成され始めていたことが知られる。象眼青磁など貿易陶磁が一定量存在することから、温泉郷領主の温泉氏が関与する遺跡と考えられる。

天文6(1537)年以降、大内氏、尼子氏、小笠原氏、そして毛利氏が銀山領有をめぐって争奪戦を繰り返した。それに伴う多数の城館が銀山周辺や街道沿い、港周辺に遺されている。1560年代前半には、毛利氏が尼子氏方との銀山争奪戦を有利に展開し、石見銀山の支配権を徐々に確立した。

慶長5(1600)年9月の閬ヶ原の戦い直後に、徳川家康は石見銀山に禁制を発し、いち早く直轄化を図った。江戸期に入ると安濃郡と邇摩郡は幕府直轄の石見銀山領となり明治維新を迎えている。

明治2年に新政府により民間に払い下げられ、明治19年までは、地元の田中義太郎、井上房市、小川兵市らや、旧松江藩家老であった安達惣右衛門らによって小規模な鉱山経営が続けられた。

明治19年に鉱区を獲得した藤田組は、翌年12月に「大森鉱山所」と改名して、鉱山経営を開始した。近代大森鉱山は、第一次世界大戦後の戦後恐慌や鉱床の深深度化などの要因によって、大正12年に休山した。

第3章 本経寺墓地の発掘調査

第1節 本経寺・西善寺の概要

本経寺は日蓮本宗の要法寺（京都市）の末寺である。『石見銀山百か寺』によれば、本経寺は山号を「松樹山」とし、大田市の法藏寺末の五寺の一つとして、銀山大谷の田中良左衛門が檀越となり、聖主院日顕が開基となって天正年間に創建されたという。

大正14年に銀山大谷から仁摩町大国上市に移転し、建物のほか境内にあった石碑・五輪塔なども大国に移転している。昭和27年9月には日蓮上人700回忌法要を盛大に催していることが古写真などから知られるが、四年後の昭和31年に23世住職日悠上人が亡くなられてから無住となり廃寺となっている。

銀山大谷の旧境内地は保存され、本堂の基壇が残されているほか、寺の正門は仁摩町大国から大

森町内の民家に移築され、現在も往時の偉容を偲ぶことができる。

一方、本経寺墓地の下方に所在した西善寺は山号を「龍雲山」と称し、元は真言宗であったとするが五世闇専の時に浄土真宗に改宗したとする。度々火災に遭い古記録が焼失し、創建の由緒等は不明であるが、七世龍雲が貞享三（1686）年に過去帳を製作している。

明治7年、15世龍野西性の時に廃仏毀釈の動きを避けるため、馬路村の横田重太郎の協力により馬路町神子路に移転したが、平成6年に無住となり廃寺となっている。

銀山大谷にある旧西善寺境内地は、龍源寺間歩坑口から市道銀山線を隔てて斜向かいの地にあり、現在は空き地となっている。



第1図 石見銀山遺跡仙ノ山周辺図 (S=1/25,000)

第2節 本経寺墓地の概要

本経寺墓地は、山吹城跡の所在する要害山東南側斜面の標高 249～253 m 付近にある上段と、標高 229～236 m 付近にある下段平坦面に展開している。旧本経寺跡の境内地は、銀山川によって形成された狹長な河岸段丘を利用して設けられており、標高 217 m 前後である。墓域は、境内の背後の要害山南東側の斜面を利用して設けられている。

本経寺墓地が大きく分けて「上段」、「下段」の 2ヶ所に分けられることは前述したが、両者の中间の標高 237～242 m 付近には、中段とでも言うべき平坦面が所在する。この中段平坦面は、現状で幅 50 m、奥行き 22 m の規模を持ち、中央付近を山吹城登山道が縦断している。登山道の北東側は、石造物などが存在しない空閑地が広がるが、道より南西側は浄土真宗に特徴的な「釈」戒名を持つ円頂方柱型墓標が多数存在している。この浄土真宗墓地については、直下の市道銀山道に隣接する西善寺跡に附属する墓地の可能性が考えられたが、工事の影響範囲でもないため、今回の調査では地形測量を行ったのみで悉皆調査を行っていない。

本経寺墓地を含む石見銀山柵ノ内周辺では、平成 9 年度に石造物分布調査が実施されている。

『石見銀山遺跡石造物調査報告書 5』では、本経寺跡墓地は「40 群」として掲載され、総数 224 基の石造物が存在し、内訳として、一石宝篋印塔 17 基、一石五輪塔 8 基、組合五輪塔 7 基、組合宝篋印塔 5 基、角塔 181 基、石仏 3 体の記載がある。今回、西善寺墓地と推定される浄土真宗墓地がこれに内包されることが判明し、ここに少なくとも円頂方柱型墓塔 178 基、地蔵 1 体が所在していることが確認されたため、本経寺墓地の内訳についても変更が生じる事となった。

さて、前述の下段平坦面は、長さ約 75 m、奥行き約 10 m ほどの規模で、7～8ヶ所程度の小空間に細分される。石造物は下段平坦面の南西側に集中しており、北東側や中央部で点在する石造物は中段、上段平坦面から転落したものと考えられる。

17 世紀～18 世紀に造立された多くの石造物は自然倒壊や改修などにより原位置を保っていないが、19 世紀以降に造立された墓塔には当初の状態を保つものも見られた。

下段の悉皆調査の結果、組合せ五輪塔 7 基、組合せ宝篋印塔 2 基、一石五輪塔 9 基、一石宝篋印塔 18 基、無縫塔 2 基、自然石 2 基、地蔵 3 基、円頂方形墓標 52 基、円頂方柱墓標 6 基、位牌形墓標 4 基、円頂六角形墓標 5 基の計 110 基が確認された。

また、上段平坦面では組合せ宝篋印塔 7 基、一石五輪塔 3 基、一石宝篋印塔 5 基、地蔵 1 基、円頂方形墓標 4 基の計 20 基が確認された。上段では 17 世紀～18 世紀前半の期間に造立が行われているが、その後は墓域としては活用されていないようである。そのため、原位置を保つ石造物は皆無で全ての墓石が倒壊、転倒した状態であった。

今年度の悉皆調査で確認された本経寺墓地の石造物の数としては合計 130 基となり、下段平坦面の北東下方に所在する O 家・Y 家墓地（日蓮宗・妙蓮寺の檀家）約 20 基と推定西善寺墓地の石造物を含めると約 330 基が「40 群」の範囲に所在することが明らかとなった。

【参考文献】

島根県教育委員会・大田市教育委員会 2013

『石見銀山遺跡石造物調査報告書 13 大谷地区

本経寺墓地の調査』

第3節 山吹城の概要

歴史

山吹城の築城が何時行われたのか判然としないが、神屋寿禎による石見銀山の発見が大永 7（1527）年とされ、それから江戸幕府直轄地の支配機能が大森町に移転したと考えられる元和年間までの約 100 年間は、「城」として機能したと考えられる。

この間、城主は大内氏、尼子氏、小笠原氏、毛利氏とその配下の部将により転々とし、それぞれの城主が在城した時代背景や敵対勢力によって、城郭機能の強化のため、郭や堀割の普請が行われている。

慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いの後、石見銀山を直轄化した江戸幕府により、翌年、銀山奉行に就任した大久保長安も、山吹城大手の休役所に入り執務を行っている。慶長9（1604）年二月二十四日付の文書には、吉岡隼人等地役人の差配で山吹城普請のため、千石につき三人の人足の徵發を命じた文書もある（高橋家文書）。

また、慶長十（1605）年十月二十六日付の「大久保長安諸役者申付状」でも城普請に駒澤、増島、竹村の各氏をあてた事が記されている（吉岡家文書 島根県教育委員会 2006）。

のことから、慶長期にも奉行所による石見銀山領の支配に必要な城郭普請は続けられていることがわかる。広大な山吹城全体の城館機能が維持されたとは考えられないが、「元和年間石見国絵図」では要害山全体が柵内に取り込まれ、山頂の主郭には櫓が描かれるなど、火急な臨戦態勢への移行も速やかに行えるよう、管理は行われたのであろう。

これまでの調査概要

山吹城跡関連で発掘調査が行われたのは、平成4年度の下屋敷地区があげられる。休役所推定地に設定された第2トレンチでは、16世紀末～17世紀前半の陶磁器類を伴う石垣、石列、礎石などが確認され、毛利氏配下時の休役所か江戸時代初期の大久保長安の奉行所の遺構ではないかと推測された。3トレンチでも17世紀初頭の遺物を伴う石垣が検出されており、同様の性格付けがなされている。

繩張り調査は、島根県教育委員会が平成5年～9年にかけて行った中近世城館分布調査において、山頂部の主郭を中心とした繩張り図が作成された。

（島根県教育委員会 1997）

のちに、調査を担当された寺井毅氏によって、大手の休役所周辺や南西尾根の郭群も追加されて、繩張り図の精度は向上しつつある。（寺井 2002）

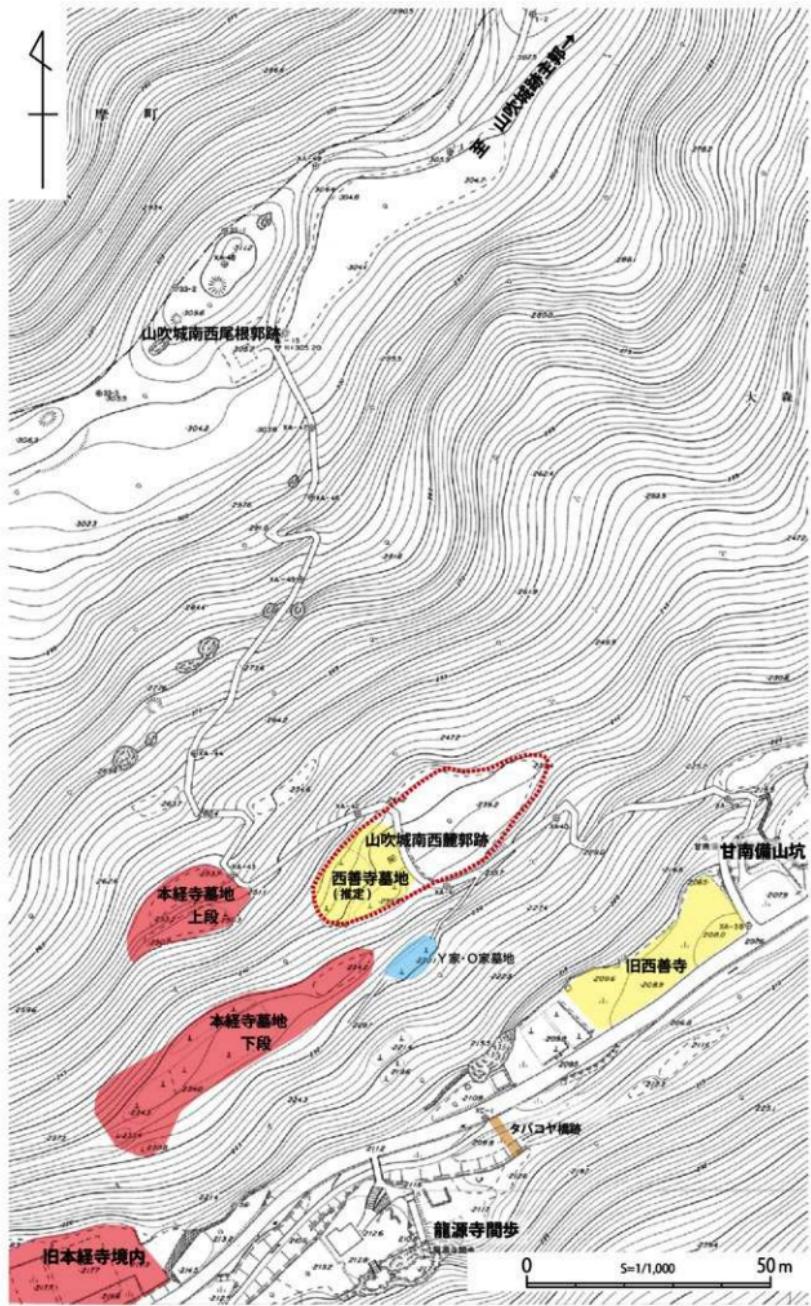
しかし、今回調査をおこなった本經寺墓地付近はノーマークであり、山吹城の全容を把握するにはいたっていない。

【参考文献】

島根県教育委員会 1997『石見の城館跡 島根県中近世城館跡分布調査報告書第1集』

島根県教育委員会 2006『吉岡家文書三十二』
『石見銀山歴史文献調査報告書II 初期石見銀山史料集』

寺井 毅 2002『山吹城と石見銀山』『戦乱の空間』創刊号 戦乱の空間編集会



第2図 石見銀山遺跡大谷地区 本經寺墓地周辺図 (S=1/1,000)

第4節 発掘調査・悉皆調査の経過

平成24年度の石造物調査は、当初仙ノ山山頂近くに所在する石銀地区の石造物を継続調査する予定であったが、平成24～25年度に実施予定の世界遺産保存整備事業石見銀山地区M工区落石防護柵設置予定地に本經寺墓地が存在することから、調査対象地を急速変更することとなった。

調査内容は、①落石防護柵の設置箇所に予定された平坦面の遺構・遺物の有無を確認し、防護柵の設計に反映することを目的としてトレーンチによる発掘調査を行うことと、②本經寺跡石造物の悉皆調査を行い、石造物の造立時期、分布状況、石造物の特色などを把握することを主眼とした。

当地は国指定史跡地内であるため、平成24年6月1日付「鳥教文財第20号の15」で文化庁長官あてに現状変更許可申請を行い、平成24年6月15日付の「24受庁財第4号の493」で現状変更許可を得た。

発掘調査は平成24年6月18日～9月10日までの間で、延べ18日間行った。

本經寺墓地の石造物悉皆調査は、延べ17人が参加して、8月6日～10日にかけて実施した。

石造物調査の成果については、『石見銀山遺跡石造物調査報告書13 大谷地区本經寺墓地の調査』(2013)を既に刊行しているので参照して頂きたい。

【調査日誌】

平成24年6月18（月）

調査開始。2T、3Tを設定し、周辺の伐開・除草

6月21日（火）

1Tを設定し、周辺を伐開・除草。

6月25日（月）

1Tの発掘開始。岩盤遺構面を確認し、絵唐津、銃弾などの遺物が出土。

6月26日（火）

1Tサブトレーンチを掘削。黄白色ブロック混土から管状銅製品、無文錢、唐津甕が出土。2T掘削開

始。表土直下より寛永通宝出土。

6月27日（水）

1Tサブトレーンチを1mに拡幅して掘削。鉄板、把手状銅製品が出土。2Tでもサブトレーンチを1mに拡幅して掘削するが、遺構面や岩盤は確認できず。

7月2日（月）

1Tサブトレーンチの掘削終了。鉄板、唐津など出土。

2Tサブトレーンチの掘削で、山側のみ岩盤を確認。3T調査開始。上段部から一石宝篋印塔が出土。

7月4日（水）

2Tの掘削、写真撮影終了。3Tの表土掘削終了しサブトレーンチ設定。

7月11日（水）

3Tのサブトレーンチ掘り下げ。礫混土層が続き変化なし。

7月24日（火）

3Tサブトレーンチで礫混土層を掘り下げ。層に変化はないが、地表下90cm付近で土師器皿が出土。

7月31日（火）

3Tサブトレーンチで礫混土層を掘り下げ。

8月3日（金）

3Tの清掃を行い、写真撮影実施。

8月6日（月）～8月10日（金）

本經寺墓地跡石造物悉皆調査。

8月7日（火）

発掘調査指導会を実施し、田中義昭、大橋泰夫、山根正明各氏から指導・助言を得た。

8月27日（月）

本經寺墓地発掘調査について、島根県庁記者クラブにて記者発表。

8月28日（火）

各トレーンチの機械測量実施。

8月29日（水）

各Tの土層断面図作成。石見銀山遺跡土砂災害対策検討会委員（河原莊一郎氏、横田修一郎氏、林秀樹氏）の視察。

9月1日（土）
現地説明会を開催し、約50名が参加。
9月6日（木）
1・2T埋戻し終了。
9月10日（月）
3T埋戻し終了。

第5節 遺構・遺物の概要

1トレンチの遺構

標高237～242m付近にある幅約50m、奥行き22mの平坦面で、この中央部を縦断する山吹城登山道より西側は西善寺墓地、東側は空閑地にわかれている。現在の登山道を越えて東側には墓域が展開しないことから、道自体が江戸時代以前に遡る可能性がある。

1トレンチは東側空閑地に幅2m×長さ10mの範囲で設定した。トレンチの谷側では、表土下15cmほどで、岩盤を掘削した平坦面を検出した。平坦面の谷側部分については、岩盤掘削により発生した拳大～人頭大の礫を充填して平坦面の扯幅を行っていることが推定された。礫を充填している範囲については、幅30cmのサブトレンチで礫の上面を検出する程度に留めたため、どの程度層厚があるのかは確認していない。

礫充填範囲の最高所は標高239mであるが、谷側に3m下った部分では標高238.45mであり、傾斜度は18%であった。

トレンチの山際の部分は、遺構面の岩盤まで1m近くの堆積土があった。平坦に掘削加工された岩盤は、サブトレンチ内では山際から礫充填範囲までの約5.4mにわたって、ほぼ標高239.20mのレベルに整えられていた。

岩盤上の堆積土は遺構保護のため、幅約1mだけを岩盤面まで掘り下げた。

岩盤の直上からは、唐津などの陶磁器、鍔の鉄製石突、火縄銃の弾丸、鉄釘等が出土している。

また、トレンチの山手側で平坦面が斜面に変換する付近では、拳大の礫が幅1mほどの範囲で集

積していた。この礫中に混在するかたちで無文銭、鉄板、銅管、把手状銅線などの遺物が狭い範囲に集中して出土している。

岩盤が礫充填範囲と接する境界付近には、幅80cm、長さ35cm、深さ5cm程の例込みが設けられているが、これがどのような機能を持つものかは判然としない。

陶磁器等の年代から、この平坦面が廃絶したのは16世紀末～17世紀初頭（慶長期）と考えられる。

調査は、遺構平坦面がどの程度山側に広がっているのかを確認することが主目的であったため、遺構面の検出は、幅1mのサブトレンチの範囲内に限定した。そのため建物遺構等を確認することはできなかったが、良好な状態で遺跡が保存されていることは確認された。

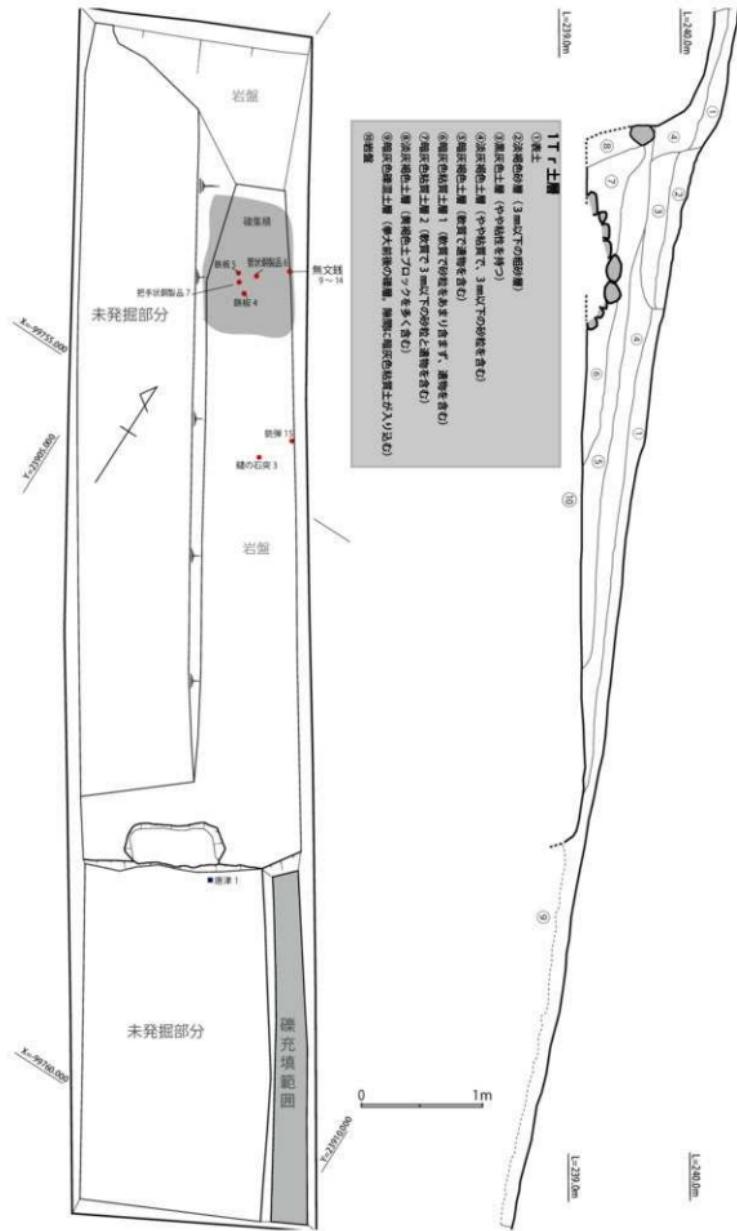
1トレンチの遺物

陶磁器としては、唐津の皿（1）、壺口縁部（2）が出土している。皿（1）は、見込みに鉄釉で植物文を描いている。壺（2）は、口縁部のみの出土であるが、口縁端部が内側に僅か肥厚する。

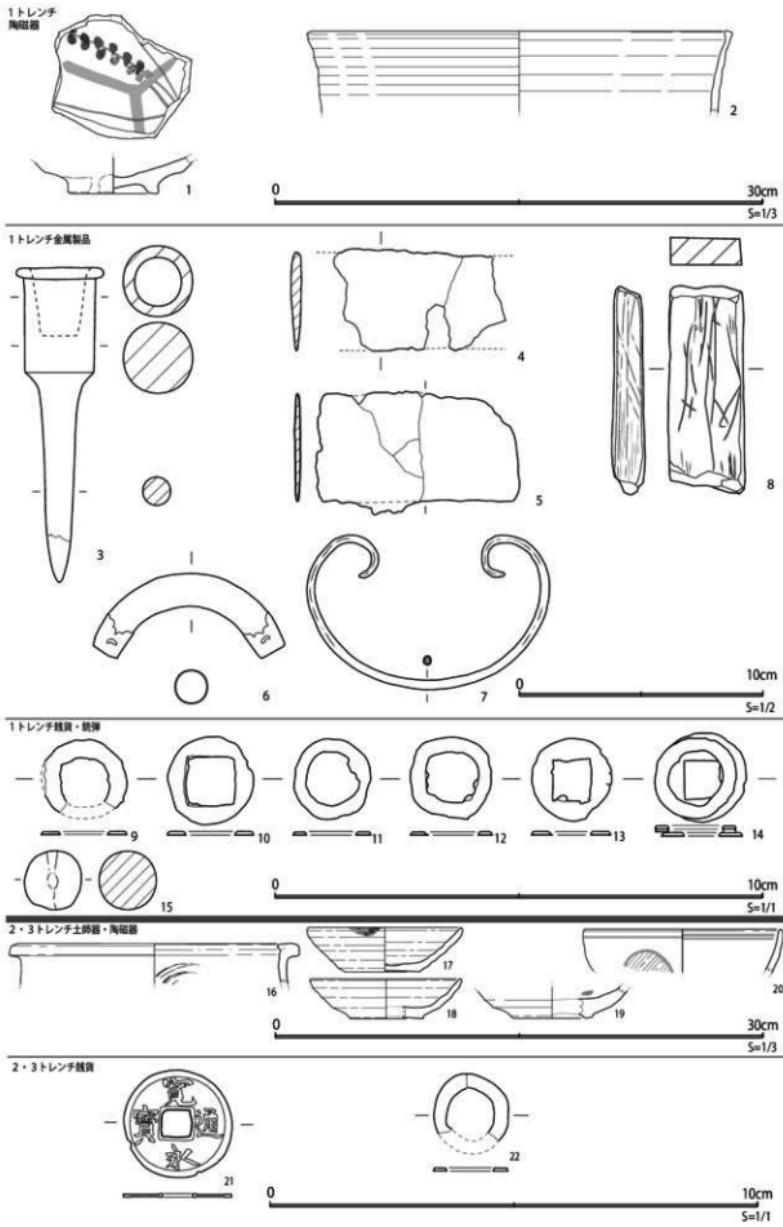
金属製品としては、鍔石突（3）、板状鉄製品（4・5）、管状銅製品（6）、把手状銅製品（7）、無文銭8枚（9～14）、火縄銃の銃弾（15）が出土している。石突（3）は、鍔尻の木部を差し込むソケット状部分は外径2.9cmほどの円柱形であるが、先端部8.5cmは、逆円錐形を呈し急速に細くなる。先端部は鋭利ではないが、地面に突き刺すことは十分に可能である。

板状鉄製品（4・5）は、幅4.2～4.5cm、長さ8.4cmほどで、穿孔などはなく用途は不明である。

管状銅製品（6）は、雲形に加工した銅板端部を折り込んでから、緩やかな「U字形」を呈する管状に成形する。蛍光X線定性分析では、銅の割合が高く、鉛が僅かに含まれる傾向が示された。折り、曲げ、非対称の伸縮などの工程に耐えうる素材が用いられていることがわかる。



第4図 1トレンチ平面図・土層断面図 ($S=1/40$)



第5図 出土遺物実測図

把手状銅製品（7）は、その形状から建具・家具などの把手の可能性がある。蛍光X線定性分析では、銅が主成分であるが亜鉛も有意に含まれており、合金としては「丹銅」といえる。

無文銭（9～14）は、8枚が重なった状態で出土しており、本来は縦であった可能性がある。

8枚とも銭径が1.5～2.2cmのB類であり、銭孔の形状では、方形（I類）は3点、円形（II類）は1点、略方形（III類）は4点である。目次謙一氏によると石見銀山遺跡では銭径1.5cm以下のC類が61%、銭孔円形が66%を占めることが明らかにされているが、本調査区出土の無文銭はやや異なる傾向を示している。（目次 2002）

銃弾（15）は、直徑1.2cmで、蛍光X線定性分析では、鉛に次いで銅が多く含まれている状況が見られた。

また、細片のため実測図を掲載していないが、胎土中に長石が顕著に含まれた信楽の壺とみられる陶片がある。内面に刷毛目調整が残る土師質の壺片も見られた。（写真図版5）

2トレンチの遺構

2トレンチは本經寺墓地下段の中で、石造物が造立されていない北東側の平坦地に幅2m×長さ5mの範囲で設定した。トレンチの山際では、地表下約1mで岩盤を確認したが、谷側へ1m弱進行した部分で岩盤は急激に傾斜している。そのため、トレンチ谷側の大半では岩盤を確認できなかった。

土層の状況では、6回以上の斜堆積層の上面に生成された平坦面を利用しながら、人為的に平坦地が拡幅されたことが観察できる。しかし、トレンチ山側が標高234.0mであるのに対して、4m谷側では、40cmほどレベルが低下し、約10%の傾斜面であり、丁寧な普請とは言い難い。

斜堆積の土中からも戦国期～江戸時代初期と推定される土師器・陶磁器などが出土している。

2トレンチは、西善寺墓地の直下にあり、「釈」

戒名の墓石が複数基付近に転落している。

2トレンチの遺物

唐津畫（16）は、4層暗褐色土の出土である。口縁端部を外反させた後、内側に肥厚させており、上面に平坦面をもつ。頸部内面には、同心円文叩きを行っている。

寛永通宝（21）は、表土直下で出土しており、西善寺墓地に伴うものと考えられる。字体から「新寛永」とみられる。

3トレンチの遺構

3トレンチも本經寺墓地下段の中で石造物が造立されていない平坦面中央部に幅2m×長さ10mの範囲で設定した。ここは幅50～100cmで平面形が「コ」字形の浅い区画溝に囲繞された、幅23m×奥行き6mほどの空間であり、区画内に建物跡などの存在が想定された。また、山側には1mほど段差をもった上段部（幅21m×奥行き2.5m）が敷設されており、上段部～下段部まで縦断するかたちでトレンチを設定した。

調査の結果、上段部では表土下10～70cmで岩盤に達したが、下段部に差し掛かる部分で岩盤は急激に落ち込み下段部分では、岩盤を確認するには至らなかった。

トレンチ谷側では表土下1.7mまで掘削したが、整地土と考えられる暗褐色礫混土層（7層）内からは、無文銭、灯明皿などが出土し、16世紀末～17世紀前半に大掛かりな整地が行われたことを推察させた。

下段部は標高233.6～233.8mに平坦面を造り出しているが、明確な礎石や柱穴跡は確認できなかった。また、上段は234.5～234.6m付近に平坦面を造成するが、ここでも建物跡は確認できなかった。

石見銀山遺跡の山中に所在する平坦地は近代～昭和40年代までは畠など農耕地として利用されており、礎石などがあったとしても原位置からは移動されている可能性が高いと考えられる。

3 トレンチの遺物

土師器（17）は、体部が直線的に外傾するもので口径は9.4 cm、底径は4.8 cmである。口縁端部外面には煤が付着しており、「灯明皿」として使用された可能性が考えられる。土師器（18）は、口径は9.4 cm、底径4.6 cmであり、(17)とほぼ同規格であるが、体部はやや内湾気味に立ち上がっている。唐津皿（19）は、見込みに胎土目跡を残す。17～19は、暗褐色礫混土層（7層）から出土している。

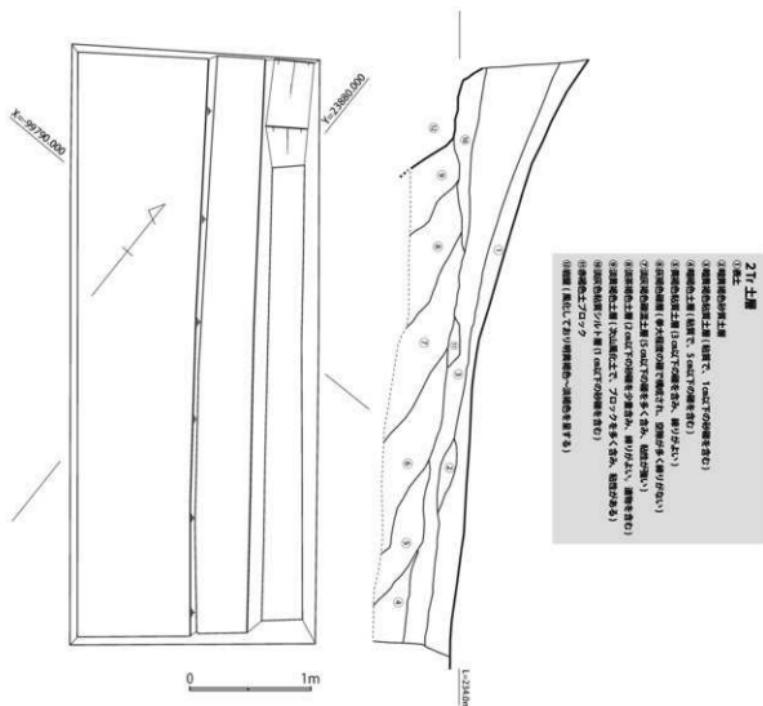
肥前磁器（20）は、やや内湾気味の口縁部を持ち、口縁外面に一重、口縁内部に二重巻線を

施している。外面には斜線を充填した「丸文」を描いている。暗灰褐色土層（2層）から出土している。

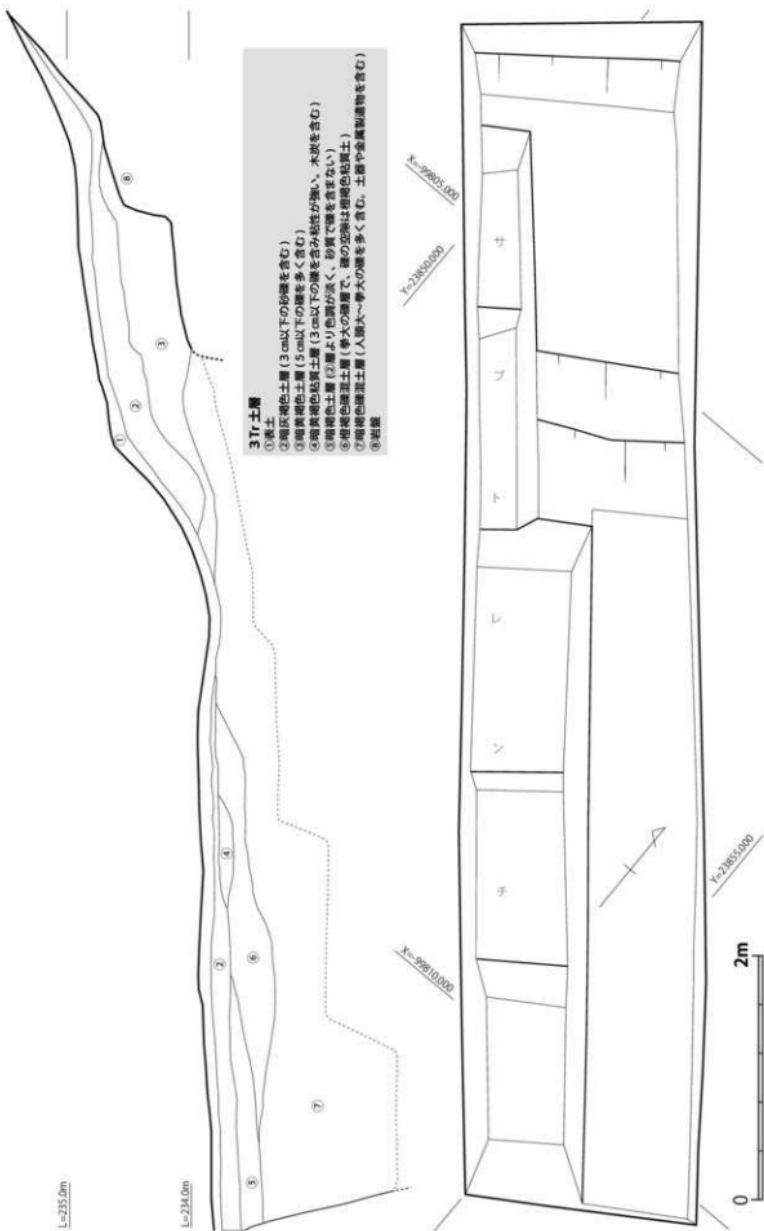
無文銭（22）は、7層から単独で出土した。銭径が1.5～2.2 cmのB類であり、銭孔の形状は、略方形（Ⅲ類）である。

【参考文献】

目次謙一 2002「石見銀山遺跡の出土無文銭について」『石見銀山関係論集』島根県教育委員会



第6図 2トレンチ平面図・土層断面図 ($S=1/40$)



第7図 3トレンチ平面図・土層断面図 ($S=1/40$)

第1表 金属製品の蛍光X線分析結果一覧

管状鋼製品【6】

[測定条件]	[測定方法]	[測定装置]
測定時間 (min)	100	SEA1200VX
測定時間 (min)	30	
試料準備	大気	
試料準備方法	大気	
コリメータ	±0.0mm	
エネルギー (keV)	15	
半周期 (A)	90	
フィルタ	PbII	
シャワー	7.1±0.1%	
ビーカー/グライム	0.0mm	
ノミント		

銃弾【15】

[測定条件]	[測定方法]	[測定装置]
測定時間 (min)	100	SEA1200VX
測定時間 (min)	30	
試料準備	大気	
試料準備方法	大気	
コリメータ	±0.0mm	
エネルギー (keV)	15	
半周期 (A)	90	
フィルタ	PbII	
シャワー	7.1±0.1%	
ビーカー/グライム	0.0mm	
ノミント		

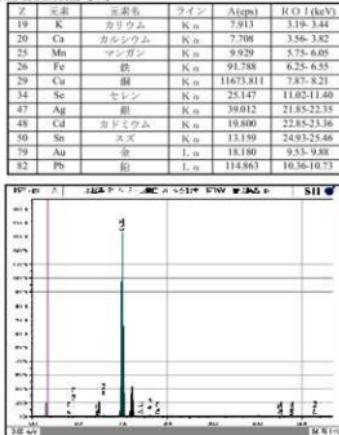
無文銭【12】

[測定条件]	[測定方法]	[測定装置]
測定時間 (min)	100	SEA1200VX
測定時間 (min)	30	
試料準備	大気	
試料準備方法	大気	
コリメータ	±0.0mm	
エネルギー (keV)	15	
半周期 (A)	90	
フィルタ	PbII	
シャワー	7.1±0.1%	
ビーカー/グライム	0.0mm	
ノミント		

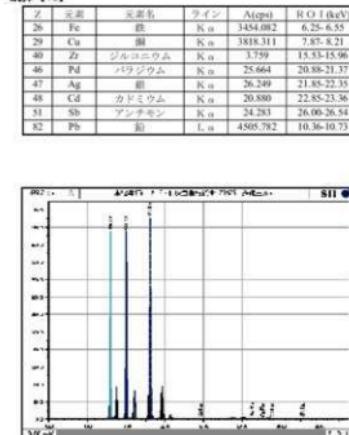
把手状製品【7】

[測定条件]	[測定方法]	[測定装置]
測定時間 (min)	100	SEA1200VX
測定時間 (min)	30	
試料準備	大気	
試料準備方法	大気	
コリメータ	±0.0mm	
エネルギー (keV)	15	
半周期 (A)	90	
フィルタ	PbII	
シャワー	7.1±0.1%	
ビーカー/グライム	0.0mm	
ノミント		

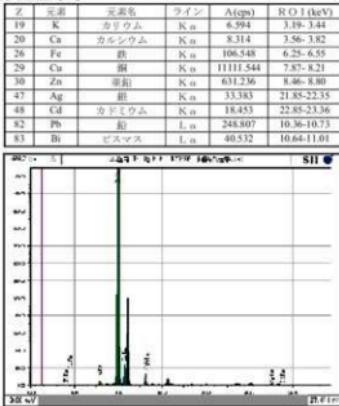
結果: 管状鋼製品【6】



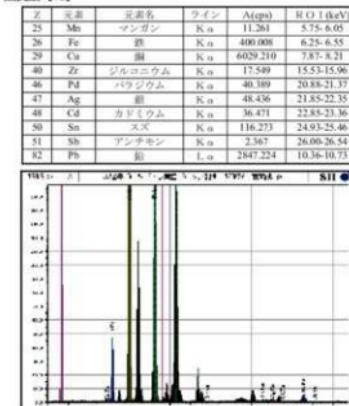
銃弾【15】



把手状製品【7】



無文銭【12】



*蛍光X線定性分析は、2013年2月8日に島根県理歴文化財調査センターにおいて、調査担当者立会のもと上山晶子が実施した。測定は、非破壊で金属遺物の表面を各1回分析している。遺物表面の汚れや土の被覆が少ない部位を選択して分析しているが、遺物本来の属性以外の情報が混在している可能性がある。金属遺物の特性を示す参考指標として掲載した。分析には、SSI・ナノテクノロジー社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置「SEA1200VX」を使用した。

第6節 発掘調査のまとめ

本経寺墓地の発掘調査では、当初想定された江戸時代の墓域内において、石造物の無い空間の実態解明が期待された。近代の耕作などにより墓域に伴う墳墓堂などの建築物・施設は確認できなかつたが、一方で地下に埋葬施設や人骨なども確認できなかつたことから、墓石の無い空間は埋葬スペースではないことも明らかとなつた。

さらに、当地が墓域となる以前に、山吹城の登場道や坂虎口として普請され山吹城の城内であつた可能性が確認されたことは大きな成果であつたといえる。

山吹城の郭などの施設が、江戸時代もある程度管理が行われ、墓域の形成にも制約を設けられていた可能性がある。

◆郭が普請された時代

山吹城は、石見銀山発見前後から元和年間に大森陣屋に石見銀山領の支配機能が移転するまで、約一世紀の間にわたつて城郭として機能していた。

今回の調査で確認された、要害山南西麓の郭は、これまでの山吹城研究・調査の中では関心の薄かった地域であり、城館遺構という認識も高くない地点であった。

発見された遺構・遺物について、再確認をしてみたい。1トレンチの遺構は、岩盤を削平して平坦面を造り出し、さらに排土砂礫を利用して谷側にも平坦面を拡幅している。この平坦面は、幅50 m、奥行22 mの規模をもち、山吹城南西麓では最大のものである。平坦面の谷側中央には下方からの坂道が取り付いており、その部分には狭い範囲ながら石垣もみられ、「坂虎口」として機能していた可能性がある。

この平坦面が郭として機能するためには、谷側の平坦面際に柵列などの遮蔽施設を設け、虎口部分には門を設置する必要があるが、今回の調査ではトレンチの拡幅を行っていないため確認は出来ていない。

1トレンチから出土した陶磁器は、唐津皿(1)、唐津甕(2)ともに生産地編年で16世紀末～17世紀初頭に位置付けられる。鍔石突、銃弾なども同時代と考えられ、一連の遺物群と推定される。

1トレンチ出土遺物には、16世紀代の陶磁器群ならば一定割合を占める青花が見られず、唐津のみであることから、17世紀代初頭に限定して考えることが至当であろう。つまり、1600年の関ヶ原の戦い後、石見銀山が幕府直轄領になってから、元和年間(1615～1624年)に山吹城の支配機能が大森陣屋に移転するまでの間が、この郭が使用され廃絶する時期に該当するものと考えられる。

つまり、1トレンチの遺構・遺物は、石見銀山が江戸幕府直轄領となり、初代奉行大久保長安から2代目奉行・竹村丹後守道清の施政下時代に機能していたものと推定できる。

これに対して2トレンチでは、平坦面自体が斜堆積の繰り返しにより形成されたもので、堆積土中に17世紀初頭の遺物を含むことから、人為的な普請と思われるが丁寧なものではない。この平坦面の用途が城郭に関連するものか現状では不明である。

3トレンチもほぼ全体を造成土で形成した平坦面であるが、下層は分層が困難なほど、一挙に埋め立てている。また、その層中に17世紀初頭前後の遺物を含んでおり、かつ平坦面全体が大きいことから、当初の使用目的を特定することは困難であるが、山吹城の普請か、本経寺墓地の付帯施設のための普請と考えられた。

◆南・西方面への防衛

大久保長安が奉行として赴任し、石見銀山で生産された銀の運搬は毛利氏時代の温泉津経由から、陸路で中国山地を越え、尾道から船積みするルートに変更となつた。このルート変更に伴い、それまで温泉津沖泊街道や温泉津を監視・防衛していた矢滝城、矢筈城、鶴丸城、櫛島城などの諸城は史料上に確認できなくなる。

そのため、温泉津方面や南方の三久須方面からの石見銀山へ侵入する外敵に対応するため、山吹城本体南側へ新規に郭を普請する必要があったのである。

慶長年間では、周防・長門国に毛利氏、広島藩に福島氏、浜田を含む津和野藩に坂崎氏、出雲国に堀尾氏が配され、石見銀山の周辺は豊臣系大名によって取り囲まれているため、山吹城の普請や兵の駐屯も続けられていたと推察される。特に、石見銀山の旧主で防長2国に押し込められた毛利氏などが仮想敵となるであろうことから、16世紀には手薄であった山吹城本体南側の防衛機能は、17世紀になって急速整えられたことが窺える。

大久保長安は石見銀山領全体の支配のため、狭隘にうえに鉱山内に入り込みすぎている山吹城から、大森町に陣屋を移転し、大森町を整備拡大する構想を持っていた。大森町の普請・整備は慶長七(1602)年には着手されているが、陣屋の移転構想が実現するためには、大坂の陣が集結し、江戸幕府に対抗する勢力が掃討される「元和偃武」を待たなければならなかった。

慶長期の大久保長安による山吹城普請は、徳川氏—豊臣氏と周辺勢力の動向に対処するための防衛策の現れであり、当時の石見銀山は銀生産では大盛期を迎ながら、政治的・軍事的緊張感にも絶えず晒されていた事を読み取ることが出来よう。

◆出土武器類について

1トレンチでは、火縄銃の銃弾(1)、鎧石突(3)など武器類の出土があったことから、この平坦面が山吹城南麓の郭遺構と推定した根拠の一つとなった。

銃弾については、中軸部に鋳型の合わせ目の歴が残る他は、ほぼ円球形であり未使用の銃弾である。この郭の守備兵が備えていたものと考えられ、大久保長安ら奉行所側が調達した可能性がある。

この銃弾は直径1.2cm、重量が5.7g(1匁半)で、蛍光X線定性分析では、主体は鉛であるが、

それに次いで銅が多く含まれることが示された。

和歌山県下の火縄銃銃弾の検討を行った北野隆亮氏は、戦国期の和歌山平野の自治組織「雜賀惣国」の拠点の一つである和歌山市・太田城から出土した未使用の銃弾5点について分析している。

太田城出土銃弾は平均値で直径1.2cm、重量8.95gであり、蛍光X線定量分析では平均値で鉛94.1%、カルシウム4.8%と示された。

また、同じく雜賀惣国の拠点で、天正5(1577)年に織田信長の紀州攻で陥落した和歌山市・中野遺跡(中野城跡)から出土した使用済みの銃弾についても蛍光X線定量分析を行っている。その結果は鉛84.9%、錫14.9%と示され、鉛と錫の合金であることが判明した。

この結果について、北野は雜賀惣国側の銃弾は鉛100%を目指して製作し、規格は直径1.2cm、重量8.95であり、二匁五分の銃弾を使用する小筒と呼ばれる小型の火縄銃に用いられたとした。

また、中野城跡で見つかった使用済みの銃弾は、織田信長方の銃弾とされ、鉛85%、錫15%の合金として製作された可能性を指摘している。(北野2013)

石見銀山の山吹城南麓で出土した銃弾は、大きさは雜賀惣国ものと同じ直径1.2cmでありながら、重量は5.7gとかなり軽い。これは、石見銀山の銃弾が鉛以外に銅を意図的に混和した鉛銅合金で銃弾を製作しているためである。鉛の比重11.43に対して、銅は比重8.82と軽い。

石見銀山出土の銃弾にはなぜ銅が多く混和されているのであろうか。可能性としては、銀の製鍊作業に必要な鉛の節約と考えられるし、永久鉱床鉱石からは副産物として銅も生産されたと推定されるので、鉛銅合金の銃弾は石見銀山ならではの所産ともいえよう。

天正13(1585)年に記された銃弾製作の秘書「玉こしらへの事」では、鉛と錫を等分で合金にすると硬く貫通力のある銃弾となることを筆頭に記している。目的用途によって、銃弾の金属配合は

変えていることも考えられるが、使用主体者毎の差異も大きいものと考えられる。(宇田川 2002, 2006)

火縄銃銃弾の元素分析例が少なく、確定的なことを言える段階ではないが、今後分析例が増えれば、銃弾の生産者による合金比率の差異などが明確化する可能性があり調査の進展が期待される。

鎧石突（3）は、刀剣類や鎧身部分に比して出土すること自体稀少な遺物である。福岡市博物館所蔵の日本三名槍の一つ「日本号」の石突がほぼ同様な形態である。

◆山吹城跡の縄張について

山吹城の縄張図作成については、島根県教育委員会が平成5年～9年にかけて行った中近世城館分布調査において、山頂部の主郭を中心とした縄張り図が作成された。（島根県教育委員会 1997）

のちに、調査を担当された寺井毅氏によって、大手の休役所周辺や南西尾根の郭群も追加されて、縄張り図の精度は向上しつつある。（寺井 2002）

しかし、今回調査を行った本経寺墓地付近はノーマークであった。寺井氏は本経寺墓地上方丘陵尾根に所在する郭を「郭19」として、毛利軍が山吹城本城攻撃のために設けた「向城」ではないかとしている。

山吹城の1世紀にわたる長い歴史の中で、南西側屋根や南麓部が城郭の一部として有効活用された期間は短いと考えられる。故に、休役所や大手口のように顕著な構造を残していない。山吹城のように城主の変遷が激しい城郭であれば、各時代の城主によって、仮想敵の侵攻を想定する方角は異なるであろう。

今後、山吹城跡の各所にわたって調査が進展し、各時期の城郭縄張図が完成することを期待したい。

教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山 石見銀山遺跡総合調査報告書平成5年度～平成10年度第1冊〔遺跡の概要〕

島根県教育委員会 1997『石見の城館跡 島根県中近世城館跡分布調査報告書第1集』

島根県教育委員会 2006『吉岡家文書三十二』『石見銀山歴史文献調査報告書II 初期石見銀山史料集』

宇田川武久 2002『鉄砲と戦国合戦』吉川弘文館

宇田川武久 2006『玉こしらへの事』『歴史中の鉄砲伝来 種子島から戊辰戦争まで』国立歴史民俗博物館

北野隆亮 2013『和歌山平野における円錐形鉛イシゴットと鉛製鉄砲玉』『紀伊考古学研究』第16号 紀伊考古学研究会

寺井毅 2002『山吹城と石見銀山』『戦乱の空間』創刊号 戦乱の空間編集会

【参考文献】

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町



第8図 山吹城全体図 (S=1/15,000)

第2表 本経寺墓地出土遺物観察表

土器・陶器

種別 番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm)			色調	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
1	1Tr	唐津	皿		(2.2)	5.4	灰釉	鉄縫	I-2期(1594~1610年)
2	1Tr	唐津	壺	(25.6)	(5.0)		暗緑褐色釉		16C末~17C初頭
16	2Tr	唐津	甕	(17.0)	(2.5)		淡灰色	内面同心円 当て具	16C末~17C初頭
17	3Tr	土師器	皿	(9.4)	3.7	4.8	淡棕褐色	灯明痕跡	
18	3Tr	土師器	皿	(9.4)	3.0	4.6	淡棕褐色		
19	3Tr	唐津	皿		(2.0)	4.9	透明釉	胎上目	I-2期(1594~1610年)
20	3Tr	肥前磁器	碗	(12.2)	(2.7)		透明釉		

寸法口径の()は、復元値を示す。器高の()は残存値を示す。

石製品・金属製品

種別 番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm)			重量(g)	色調	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
3	1Tr	鉄製品	鍵石突	13.0	3.7	3.7			
4	1Tr	鉄製品	鉄板状	(7.2)	4.2	5.0			
5	1Tr	鉄製品	鉄板状	8.4	4.5	2.0			
6	1Tr	銅製品	管状製品	6	3.5	1.1~1.4	23.4		
7	1Tr	銅製品	把手	6.4	10.2	0.4	17.7	亜鉛・鉛含む	
8	1Tr	石製品	砥石	8.5	3.1	1.4	60.2	淡紫褐色	仕上用
9	1Tr	銅製品	無文銭	1.8	1.8		(0.3)	B-III-3、鉛含む	
10	1Tr	銅製品	無文銭	1.7	1.7		0.4	B-I-3、鉛含む	
11	1Tr	銅製品	無文銭	1.6	1.6		0.5	B-II-3、鉛含む	
12	1Tr	銅製品	無文銭	1.7	1.7		0.4	B-III-3、鉛含む	
13	1Tr	銅製品	無文銭	1.6	1.7		0.4	B-I-2、鉛含む	
14-1	1Tr	銅製品	無文銭	1.65	1.65			B-III-3、鉛含む	
14-2	1Tr	銅製品	無文銭	1.6	1.6		1.3	B-III-3、鉛含む	
14-3	1Tr	銅製品	無文銭	1.8	1.8			B-I-2、鉛含む	
15	1Tr	鉛銅合金	鉛弾	1.2	1.2		5.7	1勾半	
21	2Tr	銅製品	竈水道宝	2.25	2.25	0.9	2.2		「八宝鏡」
22	3Tr	銅製品	無文銭	1.6	1.6		0.3		鉛含む

※陶磁器編年は、2000九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』による。

※無文銭分類は、1993是光吉基「国内出土のいわゆる「無文銭」について」『考古論集・潮見浩先生退官記念論文集』潮見浩先生退官記念事業会による。

写真図版

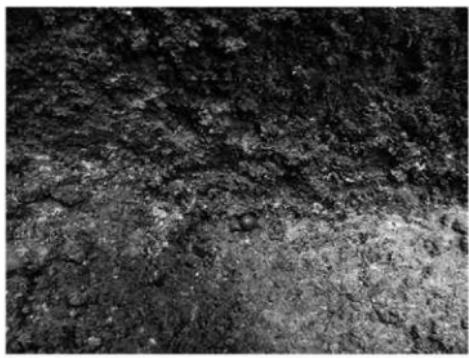


仙ノ山北展望台からみた山吹城跡

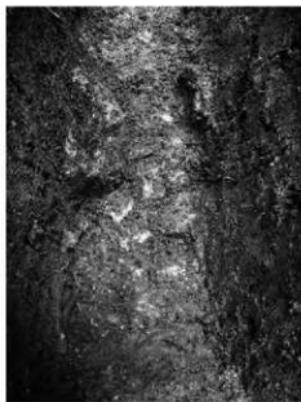
写真図版 1 1 トレンチ



本経寺墓地第 1Tr の調査状況



▲火縄銃弾出土状況



無文銭及び管状銅製品出土状況 ▶



▲本経寺墓地第 2Tr の調査状況（東から）



▲本経寺墓地第 2Tr の調査状況（南から）

写真図版 3 3トレンチ



▲本経寺墓地第3Tr上段の調査状況



▲本経寺墓地第3Trの調査状況

写真図版4 土器・陶磁器・石製品



土器・皿



土器質窯 (1T)



唐津・壺



唐津・皿



唐津・壺

肥前磁器・碗



信楽・壺 (1T)



1T…1.2.8
2T…16
3T…17.18.19.20
仕上げ用砥石

写真図版5 金属遺物



4

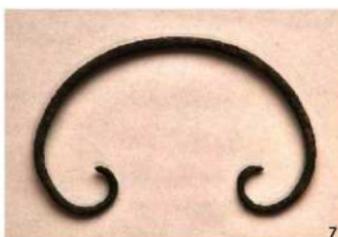


5



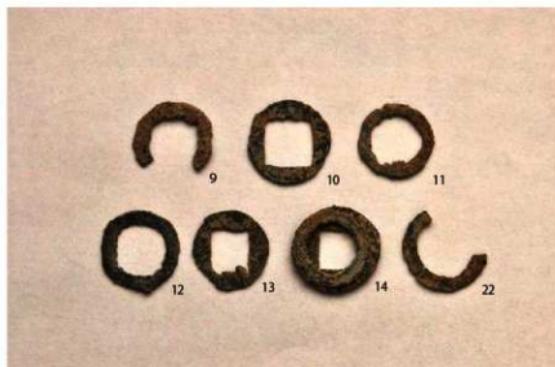
6

管状銅製品 (1T)

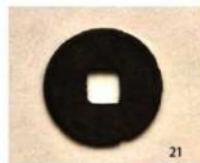


7

把手状銅製品 (1T)



無文銭 (22は3T。その他は1T)



寛永通宝 (2T)



15

火縄銃の弾丸 (1T)

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせき おおたにちく ほんきょうじぼち はっくつちょうさほうこくしょ					
書名	石見銀山遺跡 大谷地区本経寺墓地発掘調査報告書					
副書名	山吹城南西麓の郭遺構の調査					
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編執筆者	岩橋孝典					
編集機関	島根県教育委員会					
所在地	〒 690-8502 島根県松江市殿町 1 番地 TEL 0852-22-5642					
発行機関	島根県教育委員会					
発行年月	2014 年 3 月					
調査原因	世界遺産保存整備事業石見銀山地区 M 工区落石対策事業					
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査年月日
		市町村	遺跡番号			
石見銀山遺跡 (山吹城跡)	大田市大森町	32205	A62-1	35 度 6 分 2 秒	132 度 25 分 45 秒	2012 年 6 月 18 日 ～ 9 月 10 日
調査面積	50 m ²					
所取遺跡名	各種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
石見銀山遺跡	鉱山遺跡 城館跡	江戸時代 初期	郭跡	陶磁器 金属製品 石製品	世界文化遺産 国指定史跡	

大谷地区 本経寺墓地発掘調査報告書
【山吹城南西麓の郭遺構の調査】

平成 26 (2014) 年 3 月

編 集 島根県教育委員会
松江市殿町 1 番地

発 行 島根県教育委員会
松江市殿町 1 番地

URL http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/

印 刷 有限会社高浜印刷